



Proceedings of the Research Center for Makimukugaku, Sakurai City  
STUDIES IN MAKIMUKUGAKU 2022 NO.10

LATEST STUDIES IN MAKIMUKUGAKU  
Research Center for Makimukugaku, Sakurai City 10th Anniversary Volume

# 纏向学の最前線

纏向学研究 | 第10号 |

桜井市纏向学研究センター

# 纏向学の最前線

—桜井市纏向学研究センター設立10周年記念論集—

2022

桜井市纏向学研究センター  
Research Center for Makimukugaku, Sakurai City

# 纏向学の最前線

—桜井市纏向学研究センター設立 10 周年記念論集—

2022

**桜井市纏向学研究センター**  
Research Center for Makimukugaku, Sakurai City

## 序

桜井市纏向学研究センターは、2022年4月1日をもって10周年を迎えました。十年ひと昔とは申しますが、2011年の4月に桜井市立旧纏向幼稚園の園舎をいただいて設立の準備に入り、「纏向学」の構築と纏向遺跡の調査・研究と発信の拠点としての研究センターの将来に夢を馳せて、丸1年をかけて、理念や組織作り、法的な整備、事業計画の立ち上げや予算配分、10年間を見越したタイムスケジュール等々、多岐にわたる準備に熱い議論を重ねていった日々が昨日のように蘇ります。

いま、『纏向学の最前線』と題して、806頁におよぶ大部の10周年記念論文集（研究紀要『纏向学研究』第10号）の最終の責了稿を前に、この10年間の足跡の一つ一つを万感交交反芻しています。まずはここに、10周年記念の論文集が刊行されましたことをご報告するとともに、玉稿をいただいた方々、刊行にご尽力いただいた方々、とりわけクラウドファンディングの主旨にご賛同いただいた全国の応援団の皆さまに、心から厚く感謝申し上げます。

「纏向学」が10年を迎えたいま、纏向遺跡の学術的成果とその重要性はますます斯界の認知されるところとなり、その歴史的な価値や意義は国民共有の財産として高く評価されるところとなりました。この論文集の刊行によって、私たちの「纏向学」も漸うかすかな全容をお見せできたのではないかと実感しています。

とはいえ、21世紀に生きる市民に向けての「学」の還元と発信のための組織や活動はまだまだ途についたばかりです。発信基地として囑望される施設や地域の整備は未だ手つかずの状態にあります。10年後の纏向遺跡と研究センターが地域拠点として光り輝いているすがたを目指して、次の10年も一步一步着実に成果を積み上げ、発信し続けていくしか道はないようです。

共同研究員の方々をはじめ、関係者の皆さま、そして常に暖かいご支援をいただいている市民や応援団の皆さまには、重ねて感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願いいたします。

2022年6月21日

桜井市纏向学研究センター  
所長 寺 沢 薫

## 例 言

1. 本書は桜井市纏向学研究センターの設立 10 周年を記念して刊行する論文集である。
2. 執筆は、桜井市纏向学研究センターの研究員（常勤および共同研究員）のほか、当センターが行う纏向遺跡の調査・研究、普及・啓発活動等に対し御指導・御協力をいただいた各分野の研究者ならびに報道関係者等をお願いした。
3. 執筆の依頼に際しては、2020 年 8 月に 117 名に案内を送付し、最終的には 87 名より 85 編の原稿が提出された。2021 年 10 月から本格的な編集作業を開始して、2022 年 1 月上旬に入稿、校正ののち同年 6 月上旬に校了している。
4. 本書は A 4 判で本文は 806 頁の両面白黒刷り、表紙は片面 1 色刷りの袖折りとし、製本はクータ・バインディングを採用した。
5. 本書の編集は、桜井市纏向学研究センターが担当し、所長 寺沢薫の監修のもと、飯塚健太・立石千紘の協力を得て福辻淳がおこなった。
6. 本書の作成に際しては、ガバメントクラウドファンディング「ヤマト王権誕生の地から、最新の研究成果を大発信！－桜井市纏向学研究センター設立 10 周年の集大成－」を 2021 年 7 月～10 月に実施し、94 名の皆様より本書の印刷費用の 8 割以上に相当する計 2,517,000 円のご支援をいただきました。また桜井市では「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を設置し、纏向遺跡の調査研究・保存活用に関する事業を応援してくださる皆様からの寄附を募っており、例年多大なご支援をいただいております。このたび本書作成のための資金として、いただいた寄附金の一部を活用させていただきました。ご支援いただいた皆様に、あらためて御礼申し上げます。

# 目 次

序  
例言

弥生土器編年の遍歴	柳田康雄	1
大和の水差形土器考察	松本洋明	11
唐古・鍵遺跡に運ばれてきた土器（予察）－弥生時代後期から古墳時代前期を中心に－	藤田三郎	21
纏向遺跡出土の人頭形土製品	大野薫	29
近畿地方における黥面の消長	設楽博己	35
弥生時代の築城技術	森井貞雄	43
弥生時代集落の拡大と分散－乙訓地域の遺構分布の変遷から－	福家恭	49
吉野ヶ里集落における中国城郭構造の導入と日中外交	七田忠昭	59
集落の価値と関係－邪馬台国時代の筑紫平野ネットワーク－	片岡宏二	69
大分市内の弥生時代拠点集落 雄城台遺跡－その歴史的意義－	高橋徹	79
弥生集落におけるイノシシ属下顎骨穿孔・配列の再検討	宮路淳子	85
弥生時代の十進法	武末純一	95
庄内式の年代再考	岸本直文	105
中河内地域における初期庄内式甕成立から河内型庄内式甕定型化への過程素描	原田昌則	115
纏向遺跡出土のキビ系土器	草原孝典	129
奈良盆地と河内平野南部の集落・古墳からみたヤマト王権	坂靖	139
近畿弥生社会の中の漢・韓系要素	石野博信	149
移動・移住（Migration）の考古学	藤原哲	155
唐古・鍵遺跡と纏向遺跡の「板石硯」とその意義	久住猛雄	165
周濠の出現－箸墓古墳の周濠と外濠状遺構の意義－	福辻淳	175
纏向古墳群と周辺景観	北條芳隆	185
特異な初期大型墳－箸墓古墳の基準尺度－	荻谷俊介	195
箸墓古墳研究の現在地－2012年以降の研究成果から－	塚本和人	209
太鼓考	橋本裕行	217
それは「方相氏」か－纏向「木面」評価の前提－	寺沢薫	225
古墳時代初頭の水辺祭祀－纏向遺跡の祭祀土坑・纏向型祭祀を題材として－	山崎孝盛	237
「導水施設」研究の軌跡と展望－その「浄水化」性を問う－	穂積裕昌	251
纏向遺跡出土の犬骨について	宮崎泰史	261
纏向遺跡第166次、第168次調査出土の動物遺存体	丸山真史・宮路淳子	275
纏向遺跡出土の桃核ほかと土器附着炭化物の 炭素14年代法による年代測定について2－IntCal20による暦年較正結果について－	近藤玲	283
纏向遺跡出土モモ核のAMS <sup>14</sup> C年代の最新版較正データIntCal20による暦年較正	中村俊夫	291
較正曲線IntCal20と日本産樹木年輪	坂本稔	301
纏向遺跡の出土材年輪年代決定に向けて－酸素同位体比の年層内変動解析－	中塚武	309
纏向遺跡における東田地区と大市地区の成立－アメノヒボコ・ツヌガノアラヒト・兵主神－	千田稔	317
神武東征説話と魚（いよ）の道－大紀町錦地区出土遺物とその評価－	橋本輝彦	329
脇本遺跡の製塩土器の珪藻分析からみた古墳時代の製塩法 ……………金原正明・金原正子・橋本輝彦・森田梨恵子		339
「古墳」とはなにか－その成り立ちの構造的・広域的再検討－	松木武彦	345
ヤマト政権成立期における畿内地域の円丘墓と方丘墓	福永伸哉	357
古墳出現期の河内の動向	安村俊史	367
中河内における前方後円墳の始まり	吉田野乃	377
纏向時代の近江湖南地域	杉本源造	387
古墳出現期の方形墓について－兵庫県明石川流域の様相－	阿部功	395

濃尾平野の墳丘墓－文化路と地域社会－	赤塚次郎	405
北陸の弥生墳墓－越後地域を中心として－	広瀬和雄	415
越地方における前期初頭の古墳について	古川登	427
前方部の発達からみた伊予の古期前方後円墳の展開	下條信行	437
鹿児島県の初期古墳の実態	池畑耕一	445
古墳時代前期の埋葬施設－粘土槨の再検討－	真鍋昌宏	451
石材からみた畿内の竪穴式石室－石室材の地域性と使用の変遷－	奥田尚	461
石棺の排水孔	岡林孝作	469
古墳時代開始期における鍛冶技術の変革とその背景	村上恭通	481
4世紀の倭国事情－古墳の動向と湊津－	寺沢知子	493
辰王と卑弥呼	東潮	505
朝鮮半島南部の諸勢力と初期ヤマト王権の対外関係	井上主税	517
朝鮮半島系準構造船（加耶タイプ）の生産と日韓の造船技術	柴田昌兎	527
槻とヤマト王権の始原	辰巳和弘	537
王権の地の護り－神祇に関わる槻－	甲斐弓子	547
日本古代における伝承と史実の間－オケ・ヲケ伝承を手がかりに－	古市晃	557
人制の研究史－五世紀の国家形成史論を見据えて－	堀大介	569
再論 6・7世紀における三輪氏の氏族構造	加藤謙吉	581
海柘榴市衢の景観	前田晴人	591
「泊瀬の山」考	服部伊久男	603
纏向の文学イメージ－山びとの降り来る里－	上野誠	613
大神神社の神仏習合についての一考察	山田浩之	619
漢武帝・宣帝の半島・列島支配－中国古代帝国主義の東夷支配：その始まり－	水林彪	629
『三國志』東夷傳の思想構造	渡邊義浩	641
卑弥呼景初2年朝貢説再論	仁藤敦史	651
ロシア沿海地方における渤海の領域について	小嶋芳孝	659
寺沢「弥生国家論」のパラダイムの意義と纏向遺跡の含意	森岡秀人	667
狗奴国論争の行方	松田度	677
古墳時代中期東国は国家段階か？	佐々木憲一	687
昆陽上池と昆陽下池の築造とその機能	小山田宏一	697
江戸時代の「崇神天皇陵」と「景行天皇陵」	谷山正道	705
村落共同体の祭祀組織（「宮座」）の研究		
－「桜井市江包・大西のお綱祭」（中世末期の興福寺と在地農民の関係）－	浦西勉	717
あえて「日本列島人の系譜」について考える	片山一道	727
纏向遺跡雑感－ヤマト政権成立の地－	坂井秀弥	735
纏向石塚古墳2題	山本哲也	743
弥生時代から古墳時代へ－中学校社会科歴史的分野の授業づくり－	石橋源一郎	745
博物館と情報	文珠省三	757
史跡のある風景	井原縁	763
三輪山の山景を生かした散策の企画－観光学確立に向けた試論－	来村多加史	769
纏向遺跡はなぜ報じられるか	関口和哉	777
ジャーナリズムから見た「纏向学」	渡部裕明	781
取材する側から見た箸墓・纏向遺跡	黒沢恒雄	787
2つの“邪馬台国”を見つめて－纏向と吉野ヶ里・取材雑記－	柳澤伊佐男	791
桜井市纏向学研究センターのあゆみ		797
執筆者一覧		803
編集後記		